

尾張北部の旧丹羽郡の学校史(1)

— 岩倉市の寺子屋から小学校設立へ —

School History of Old NIWA District in NORTH-OWARI (1)

— From Temple School to Elementary School in IWAKURA City —

木全 清博 *Kiyohiro Kimata*

(人間発達学部)

はじめに

生まれ育った尾張北部の町の方言に「しとなる」「しとねる」という言葉があった。子どものころから親や地域のおとなが子どもに対して、「あそこの子はよくしとなっている」「あの子はよくしとねられている」ということを聞いた。「しとなる」「しとねる」という言葉が「ひとなる」「ひとねる」のことで、子どもを一人前のおとなに育てることだと知ったのは、教育研究を志してからだいたいぶたってからであった。「ひとなる」「ひとねる」は、日本の民衆の間で13世紀から子育てをあらわす言葉であった。民衆に脈々と引き継がれた意義深い言葉であることに感動した。その後、「しとなる」(育つ)は尾張の方言だけでなく、三河でも使われて愛知県だけでなく岐阜県揖斐郡、長野県筑摩郡でも使われ、「しとねる」(育てる)は愛知、岐阜、長野県伊那郡でも使われていることが分かった。

2004年の自著に上記のようなことを書いたことがある¹⁾。現今の学校や教育をめぐる情勢を見る時、人を育てる教育の根本を省みることなく、学びの質を問わない高学歴志向だけが強く求められているように思われる。本当に現代の学校は学ぶ者にとって教わる喜びや学ぶ楽しさを与えているのだろうか。明治維新より150年たった現在、あらためて近代日本の学校の成立と展開のあり方を根本的に見つめ直す必要がある。その際に近代の原点となる近世の民衆の子育てと学びの姿から問い直すことが重要と考える。

江戸時代の寺子屋で、寺子たちに人としての心得を説いた言葉があった。「人の人たるの人は 人を人とす 人の人たらざるの人は 人を人とせず」(笹山梅庵『寺子制晦之式目』1695〈元禄8〉年)。寺子屋の師匠が自戒を込めて語ったともいえるし、寺子の子どもに諭したともいえる。まことに人を育てる仕事に関わる含蓄ある言葉であるといえよう。

1980年代前半は北海道で、1980年代後半からは滋賀での地域教育史研究を重ねてきたが、約半世紀を経て愛知の地で研究する機会を得ることができた。尾張北部の自らの育ってきた地域では、近世末から明治初期にはどのような教育史が展開されてきたのだろうか。地域の民衆の子育ての具体的なようすはどのようなであったのだろうか。これらについて全く無知であった。手がかりとなるのは尾張北部地域での寺子屋の実像であるが、天保期ごろから尾張北部では寺子屋がどのように成立し展開してきたのか。愛知県では明治維新

後の1872(明治5)年8月の「学制」公布に先立って「義校」が創設された。地域住民に任せて運営したとされる義校は、寺子屋とどのような関係があったのか。1年後の1873(明治6)年になり義校はすべて廃止され、小学校へと切り替わっていくが、地域の民衆はこのような変化にどう対応したのか。江戸時代末期の寺子屋の実態から義校の設立を経て、近代的な小学校の設立までの道のりを掘り下げていきたいと考える。

さて、寺子屋研究に関しては、愛知県はすぐれた先行研究を有している。文部省は1883(明治16)年から全国で調査した寺子屋・私塾を、『日本教育史資料』八(1892〈明治25〉年)にまとめたが、調査地域や内容や方法に不十分なところが多かった。愛知県の寺子屋では渥美郡、幡豆郡が全く抜け落ちていた。1931(昭和6)年に愛知県教育会あいちけんきょういっかいは編纂責任者伊奈森太郎いなもりたろうが中心になり、県下の全尋常高等小学校、尋常小学校の教員じんじょうこうとうしょうがっこう じんじょうしょうがっこうに呼び掛けて各校区の寺子屋の実態調査を行った(以下1931年調査とする)。各校の調査報告書は、『維新前寺子屋、手習師匠、郷学校、私学校の調査』としてまとめられた²⁾。愛知県の寺子屋数は明治期の文部省調査で975校(尾張部521校)であったが、1931年調査では約2倍の1870校(尾張部875校)が確認された。しかし、同調査も対象小学校637校のうち回答校522校で82%であった。戦後になって愛知県教育史編纂の調査として1970年代初頭にも行われ、『愛知県教育史(古代・中世・近世編)別冊 愛知県寺子屋一覧』(1973〈昭和48〉年)にまとめられた(以下1973年調査とする)³⁾。この書は冒頭に「維新前寺子屋私塾一覧」・「愛知県史」・「名古屋市史」・「各郡市町村史」及び実地探訪の史料によって寺子屋一覧表を作成したと書いている。だが、出典名や実地探訪地の詳細が全く明記されていない難点があった⁴⁾。同書では4111校(尾張部1963校)としている。

1931年調査報告をもとにして、東脩そくしゅうや謝儀しゃぎに焦点をあてて愛知県全体の寺子屋の特質をみごとに描いた先駆的研究がある。丹羽健夫『愛知の寺子屋』(2007年)である⁵⁾。本稿は丹羽の切り開いた寺子屋研究に導かれながら、尾張北部の旧丹羽郡の地域で展開した寺子屋の実態から地域の民衆の子育ての思想、明治初期の義校から小学校への学校史の始まりを考察していく。なお、現在の丹羽郡と区別するため、「旧丹羽郡」の呼称を使う。

1 旧丹羽郡の地理的位置と寺子屋の設立・開業

(1) 尾張北部の旧丹羽郡の地理的位置

尾張北部に広がる濃尾平野は、木曾川(古名広野川)によって形成された扇状地の平野で、自然堤防およびその後背湿地上に位置しており、扇状地の起点部で標高42メートル、末端では2メートル前後である⁶⁾。木曾川が山岳部から流れ出て形成した扇状地の要が犬山市であり、犬山城の標高は84メートル、旧城下町で50~60メートル、木曾川の分流である五条川(旧幼川)、三宅川、青木川などの大小河川が広大な平野を南に流れている。北部から現在の行政区画で犬山市、扶桑町、大口町、江南市、岩倉市が位置しており、末端部岩倉の標高は6~12メートルであり、用水路に恵まれて古代から農耕に適した田畑

の広がる農業地域であった(図1)。

広大な濃尾平野は、近世において尾張藩の単一支配地域であった。近世後期の尾張藩は丹羽郡115カ村を支配していた。明治初期に犬山藩、今尾藩(両藩とも尾張藩家老)の藩領になる村もあった。近世の丹羽郡の郡域は、現在の犬山市・江南市・岩倉市・柏森町・大口町・一宮市の一部(千秋、丹陽、西成)を含んでいた。1878(明治11)年になって丹羽郡役所(役所位置一小折村)が設立され、近世の丹羽郡の郡範囲を継承していく。1880(明治13)年に旧丹羽郡の村落数は、105カ村であった。1926(大正15)年に郡役所制度が廃止されるが⁷⁾、明治期・大正期の近代尾張の北部地域は、

1954~55(昭和29~30)年の昭和の市町村合併までは、ほぼ旧丹羽郡の郡域を保っていた(1940年に西成村、1955年に丹陽村、千秋村が一宮市編入)。昭和の市町村合併で旧丹羽郡は、3町村(岩倉・大口・扶桑)になった。

- 1954年—犬山町、城東村、池野村、楽田村、羽黒村の1町4村合併、犬山市へ(4月)
- 古知野町、布袋町、葉栗郡草井村、宮田町の3町1村合併、江南市へ(6月)
- 1955年—丹陽村が一宮市へ(1月)、千秋村が一宮市へ(4月)

激変していくのは戦後の1950年代後半から1960年代、さらに1970年代までの高度経済成長により、尾張北部の地域的特質も産業基盤も大きく変化していった。高度経済成長下での旧丹羽郡の市町村の変化は、1962年の大口町(4月)、1971年の岩倉市(1月)の誕生であった。平成の大合併(2005~2010年)で愛知県下の行政区画が大激変したが、旧丹羽郡での市町村合併は行われなかった。現在の丹羽郡は、扶桑町と大口町の2町である。

(2) 旧丹羽郡における寺子屋の特質と設立の背景

愛知県教育会による1931(昭和6)年調査の寺子屋を分析した丹羽健夫は、旧丹羽郡は束脩(現在の入学金)・謝儀(現在の授業料)の金納度が極めて高かったとしている。尾張西部地域では「丹羽郡が76.4%でトップ、2番が海部郡で71.9%、3番が中島郡で62.5%、4番が葉栗郡で60%、そして名古屋市が意外なことにどん尻で53.7%である」⁸⁾と



図1 濃尾平野地形図
(長谷川輝『町屋 村物語』口絵)

書いている。逆に物納度は、葉栗郡20%、丹羽郡10.7%、名古屋市5%、中島郡1.7%、海部郡1.1%であった。通常の寺子屋の説明では、親が子どもを連れて寺子屋に入塾する時に米や野菜、その他の品物を持参して（束脩）、盆や暮れ・正月などにやはり物を持参する（謝儀）とされており、物納が主流とされている。幕末から明治初期にかけて旧丹羽郡の寺子屋は、具体的な金額を示した純粋な金納、物納と金納の両方、半期ごとに金納を示す内容を併せて、76.4%が金納であったのである。

1931年調査は愛知県の寺子屋分布を、図2のように名古屋市、尾張西部、尾張東部、三河西部、三河東部と分類し、尾張西部（丹羽郡・葉栗郡・中島郡・海部郡）と尾張東部（東春日井郡・西春日井郡・愛知郡・知多郡）に区分している。丹羽健夫は、尾張西部に関する謝儀の金額をさらに詳しく表1のように整理した。筆子とは寺子屋に通う子どもである。

寺子屋の師匠は、農民、医者、僧侶・神職、武士など本職を持つ兼業の者が圧倒的であり、専業者は少なかった。名古屋の筆子平均数87.8人が最高で、寺子屋師匠の年間収入が

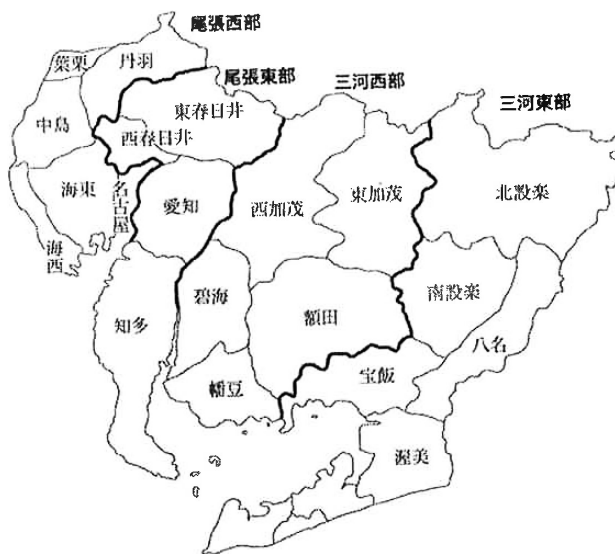


図2 昭和8年の愛知県行政区分
(丹羽健夫『愛知の寺子屋』45頁)

表1 尾張西部の年間謝儀の金額

	金納度の高い寺子屋	筆子数の平均	年間謝儀の平均	年間収入
名古屋市	29校	87.8人	8朱	702.4朱 (43.9両)
中島郡	33	40.8	6.8	265.2 (16.5)
海部郡	37	58.9	2.8	164.9 (10.3)
丹羽郡	47	47.1	3.1	146 (9.1)
葉栗郡	12	54	2.7	145 (9.1)

(『愛知の寺子屋』57頁)

7024朱(43.9両)であった。丹羽の計算によると、幕末期には年間12両ほどで生計を立てられたので、城下町で商業地をかかえる名古屋の寺子屋師匠の経営は十分成り立っていた。反対に、名古屋を除いた他の郡では、兼業で他の職業を持たないと経営は難しかった。旧丹羽郡の場合は謝儀の金納度が高かったが、1つの寺子屋に通う筆子数はどこも少なく、専業での経営は難しかったことが分かる。

では、旧丹羽郡の寺子屋は、どれくらい設立されていたであろうか。1878(明治11)年の「郡区市町村制編成法」によれば、丹羽郡役所の成立時点での村は105カ村であった。1931年調査はその後の町村合併を経た13カ村の小学校から、寺子屋の実態報告書を提出させた。旧丹羽郡では31校調査対象校から30校の回答があり、未回答は布袋尋高小^{ほてい}だけであった。整理してまとめると、表2のようになる(表前に現在の市町を掲載)。

表2 旧丹羽郡の寺子屋数(校数)

* 尋高小=尋常高等小学校、尋小=尋常小学校

犬山市	犬山町7(犬山尋高小6、犬山南尋高小1)、城東村5(城東尋高小1、城東第二尋小1、城東第三尋小3)、楽田村9(楽田尋高小)、池野村8(池野尋高小)、羽黒村6(羽黒尋高小) 計35校
扶桑町	扶桑村20(扶桑尋高小9、高雄尋小10、山名尋小1) 計20校
大口町	大口村18(大口第一尋高小7、大口第二尋高小11) 計18校
江南市	古知野町11(古知野南尋高小4、古知野東尋高小2、古知野北尋高小3、古知野西2)、布袋町5(布袋尋小) 計16校
岩倉市	岩倉町13(岩倉尋高小5、岩倉尋小8) 計13校
一宮市	千秋村12(千秋尋高小6、千秋第一尋小5、千秋第二尋小1)、丹陽村17(丹陽尋高小8、丹陽西尋小6、丹陽南尋小3)、西成村17(西成尋高小5、西成第一尋小4、西成第三尋小5、西成第四尋小3) 計46校
	総合計 148校

(『維新前寺子屋、手習師匠、郷学校、私学校の調査』より作成)

上記の寺子屋数の校数に関して、1931年調査の合計は各郡の巻頭頁の集計では138校となっていたが、調査用紙を子細に検討すると148校を数えた。数値が異なっていたのは、楽田村(2→9校)、布袋町(3→5校)、岩倉町(11→13校)、大口村(19→18校)、犬山町(7→6校)、扶桑村(21→20校)、丹陽村(15→17校)であり、138校に増加10校となったので加えた。犬山尋高小は、旧犬山藩校敬道館を記載して報告しているので省いた。なお、布袋町の寺子屋として『五明区史』(1987年)に寺子屋7校が掲載されていた⁹⁾。

1931年調査から約40年たった1970年初めに、愛知県教育委員会が愛知県教育史編纂のために寺子屋調査を行った。先に見た『愛知県寺子屋一覧』(1973年)にまとめられ刊行されたが、各市町村史などの出典が明記されず実地再訪調査の内容も明らかでないので、各市町村の寺子屋を正確には確認できない。また、『愛知県寺子屋一覧』の寺子屋表は1931年調査データの読み取りで誤読(特に人名)が多い。同書の寺子屋表はその後十分な吟味と検討がされないまま、1973年以降に刊行された県下の多くの市町村史が無批判に引用している。

1973年調査は、当時の市町村の行政区分によって寺子屋数を出している。1931年調査にあわせた町村区分ではないので、1931年の行政区分に修正した上でないと比較考察ができない。本稿では、1931年段階の村落に修正して、旧丹羽郡の寺子屋をあとづけてみる。

表3 『愛知県寺子屋一覧』（1973年）の旧丹羽郡の寺子屋数

犬山市	犬山町25（稲置村21、五郎丸村2、橋爪村1、木津村1）、城東村20（善師野村7、栗栖村3、富岡村1、継鹿尾村2、塔野地村3、前原新田村1、今井村3）、楽田村14（楽田村7、楽田原新田2、二之宮村5）、羽黒村9、池野村9（奥入鹿村5、神尾入鹿新田4） 計77校
扶桑町	扶桑村8（柏森村4、斎藤村3、高木村1）、高雄村11（下野村4、犬山羽根村7）、山名村4（南山名村1、山那村3） 計23校
大口村	小口村11（余野村6、小口村5）、富成村7（河北村4、外坪村3）、豊田村4（御供所村4）、秋田村3、大屋敷村3 計28校
江南市	古知野町17（古知野村1、北野村1、宮後村1、前野村2、両高屋村3、和田勝佐村5、江森村1、山尻村1、上奈良村2）、布袋町14（赤童子村2、寄木村1、安良村2、今市場村1、五明村1、東大海道村1、小折村5、曾本村1） 計31校
〈参考〉「葉栗郡から昭和合併で編入」	
	宮田町14（宮田村6、前飛保村2、後飛保村3、松村村3）、草井村9（草井村2、小塚村3、村久野村4） 計23校
岩倉市	岩倉町7、幼村4（八鍛村2、石仏村2）、豊秋村12（曾野村2、岩倉羽根村2、大地村3、川井村4、大山寺村1）、島野村4（北島村2、野寄村2） 計27校
一宮市	千秋村27—旧幼村5（加納馬場村4、芝原村1）、豊富村9—浅野羽根村（千秋）3、小山村2、町屋村3、天魔村1）、青木村6（佐野村4、穂積塚本村2）、浮野村7（勝栗村2、浮野村3、熊代村1、加芳村1） 計27校
（丹陽）	丹陽村—九日市場村3、二川村4（五日市場村2、伝法寺村2）、三重島村11（外崎村1、平島村2、重吉村4、三ツ井村4）、多加森村9（吾鬢村2、森本村2、多加木村2、猿海道村3） 計27校
（西成）	赤羽根村10（丹羽村1、小赤見村2、柚木 鳳 ^{ゆのきおろし} 村1、大赤見村3、定水寺村3）、馬見塚村2、浅野村8（浅野村4、南小淵村2、北小淵村2）、穂波村5（春明村1、西大海道村4）、時之島村3、瀬部村2 計30校
	総合計 270校

（『愛知県寺子屋一覧』1973年より作成）

1931年調査による寺子屋数の148校に比べて、1973年調査では約1.8倍の270校となっている。1973年調査から旧丹羽郡域の多くの町村において「大字」、「字」規模で寺子屋が設立されたことが明らかになった。1村で1校から数校の寺子屋が存在して各村落には教える教師（師匠）がおり、村の子どもに読み書きが教えられ、地域の生活に役立つ知識を教えられていたことを確認できる。

なお、愛知の寺子屋数に関しては、『愛知県教育史』第2巻（1972年）で総数3985校（尾張部1836、三河2149）であるが、『愛知県寺子屋一覧』（1973年）では総数4111校（尾張部1963、三河部2148）となっている。2つは同じ愛知県教育委員会の編集本でかつ1年しか変わらない同時期の調査であるが、校数の異同の理由は明らかでない。

さいごに、旧丹羽郡の寺子屋の開業時期を確かめておこう。『愛知県教育史』第2巻の「年号別寺子屋開業数」から、表4に修正して丹羽・葉栗・中島の3郡を掲げてみよう。

表4 尾張3郡の年号別寺子屋開業

年代	(西暦年)	丹羽郡	葉栗郡	中島郡	尾張部
文政以前		6	3	8	22
文政	(1818~29)	6	3	5	40
天保	(1830~43)	33	2	31	166
弘化	(1844~47)	5		7	33
嘉永	(1848~53)	18	5	28	114
安政	(1854~59)	28	14	34	157
万延	(1860~)	3	3	3	23
文久	(1861~63)	15	9	11	68
元治	(1864~)	4	1	2	30
慶応	(1865~68)	15	3	9	70
明治	(1868~)	27	3	32	175
その他		12	15	18	62
不明		87	14	92	688
計		259	75	280	1836

(『愛知県教育史』第2巻 17頁を一部修正)

旧丹羽郡では幕末の天保年間33校、嘉永年間18校、安政年間28校と3つの時期に実に79校が開校している。3つの時期は尾張全体の開校時期のピークと重なっている。さらに幕末に近づく文久年間15校、慶応年間15校が開校している。なぜ江戸時代の幕末にこれだけの多数の寺子屋が設立されたのか。幕末期に尾張北部の地域民衆にとって、村の教育機関である寺子屋で読み書き算の知識を身につけようとした背景について考えていく。

(3) 尾張北部の寺子屋設立の背景

近世末期における尾張北部の社会では、商品作物である青物、綿や生糸の流通市場が成立して、市場経済が広汎に展開していた。尾張藩主徳川宗春の治世初期の1730(享保16)年までに一宮村の三八市のみならず、荊安賀(一宮)・起・岩倉・小折・豊場(豊山)・木田(美和町)・稲葉(稲沢)・須成(蟹江)の市があいついで開設された。これらの市は城下町名古屋に野菜など青物をはじめ、多くの商品を供給する物資の集散地枇杷島の市と結びついた。尾張平野の農民は商品作物を生産して、商品売買での取引を通じて金銭取引を広汎に展開していた¹⁰⁾。

真清田神社門前の月6回の六斎市は、三と八の日に開かれたので三八市と呼ばれたが、尾張各郡から商人や農民が集まり商業取引を活発に行った。1790(寛政2)年ころの尾張では図3のような商品作物の地域的分業が成立していた。中島・丹羽・春日井3郡の南部から海部郡東部にわたる青物類の生産地帯、丹羽郡一帯の養蚕地帯、中島・丹羽・葉栗3

郡の綿作地帯である(図3)。「青物地帯の農民が綿を買い、綿作地帯の農民が青物を買う場所として、三八市がにぎわった」(『愛知県の歴史』174頁)。1842(天保13)年の三八市に出ている商人490人の名前が記された資料では、一宮村188人、残りは市日に家の軒先を借りて店を出した他村人で、中には美濃から来た者もいた。糸の売買36軒、綿屋29軒が一宮周辺から出ており、一宮村の綿屋18軒中16軒は常設店舗で商いしていた。

次に、一宮の三八市に連動していた旧丹羽郡の市として、岩倉の市と小折(布袋)の市を見ておこう。岩倉村の地名には、上市場・中市場・下市場・鈴市場・

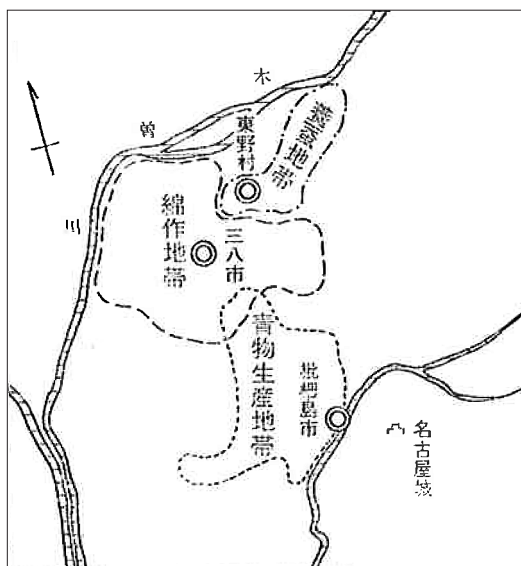


図3 尾張平野の地域的分業
(『愛知県の歴史』175頁)

大市場があるが、これらの地名は17世紀後半の『寛文村々覚書』(1670年前後作)に登場している。すでに江戸時代以前に存在した市場に由来するといわれる¹¹⁾。岩倉の市は、1727(享保12)年に尾張藩によって認可されて、六斎市(毎月五日、十日、十五日、二〇日、二五日、晦日の六日)と、毎年2月、3月中及び12月20日から晦日までの日市(毎日たてる市)が始まった。『尾張 徇行記』の発行された1822(文政5)年には、岩倉村は3470石余で戸数415戸、人口は1740人であった。1835(天保6)年には178軒が商工業を営んでいたとの記録がある(『岩倉市史』上巻は191軒と記載している)。

一方、岩倉の北へ約1キロに位置する小折村でも、市が開かれていた。小折村は生駒氏本貫の地で、『寛文村々覚書』では概高1920石6斗9升6合となっている。17世紀後半の時点で、戸数252戸、人口1453人であった。19世紀初めの『尾張徇行記』では、1766石余を生駒求馬が知行しており、戸数は420戸に増えたが人口は1625人であった。『尾張志』(1844<天保15>年)には、枝村として東布袋野・西ほていの・山村・油垣外・小郷・荒門の6カ村がみえる。小折村は岩倉の市の4年後の1731(享保16)年に、藩の許可がおりて市を開設した。岩倉と同じく六歳市および、2月・3月中と12月20日から晦日までの日市であった。隣の古知野村も1743(寛保3)年に六歳市が開かれるようになった。

3 石仏村の寺子屋から近隣村、岩倉村の寺子屋へ

(1) 石仏村・八剣村の寺子屋

私の生まれ育った石仏村は、岩倉市の北端にある村である。村の中心部を犬山街道(岩

倉街道ともいう)が走り、街道筋に住宅が集中してその背後に田畑が広がっている純粋な農村地帯である。東に五条川が流れて、五条川からの用水路を一之井と、定井で二之井を引き込んでいる。近隣村落に五条川上流の井上村、南流する五条川左岸の八劔村、右岸で隣接村する神野村が存していた(図4)。19世紀初めの村高は石仏村338石余、神野村161石、井上村75石余、八劔村1082石余であった(『尾張徇行記』1822年)。4村の戸数・人口は、石仏村95戸・312人、神野村55戸・209人、井上村19戸・93人、八劔村104戸・387人となっている。岩倉北部地域では、八劔村の石高、人口規模が大きい¹²⁾。



図4 石仏村と近隣村(近世12カ村)
(『岩倉市史』上巻 85頁)

『文部省資料』八(1892年)には、岩倉北部では八劔村の小島喜右衛門経営と小川浄信経営の2カ所の寺子屋が記載されている。両寺子屋は習字のみ教え、開業・廃業とも不詳、生徒は小島経営一男60人、小川経営一男30人とあるのみであった。1931年調査では、八劔村2カ所に加えて、石仏村の宮田平右衛門経営の寺子屋が登場してくる。1973年調査では石仏村にもう1カ所、稲原寺道山和尚の寺子屋が記載されている。表5の通りである。寺子屋に通う寺子は、統計上では圧倒的に男子が多い。

表5 石仏村・八劔村の寺子屋

師匠名	身分	位置	開業	廃業	寺子数	学科
宮田平右衛門	農	石仏村		明治5	男40女10	読・書
道山(稲原寺)	僧	石仏村		明治初		読・書・算
小島喜右衛門	農	八劔村	天保期	明治初	男60	読・書・算
小川浄信	僧	八劔村		明治初	男30	読・書

(『愛知県寺子屋一覽』1973年)

1931年調査では、宮田平右衛門の寺子屋は、8歳から12歳まで4年間の修業期間で、授業時間が午前8時から午後3時までで祭日のみ休業した。習字では「いろは文字・実用文字・百姓往来・奉公人受状・宗門帳・商売往来・田地売買証券」、読書では「四書(論語・孟子・大学・中庸)」を学ばせた。農村地域なのに、百姓往来だけでなく商売往来や奉公人受状、さらに田地売買証券までも教えている。このような商業活動に関する基礎知識を学ばせてほしいとの村民の要求が存在していたのである。2月25日は学問の神様

すがわらのみちざね めいにち
菅原道真の命日。この日の天神祭には
てんじんきょう
天神経を読んで学業成就を祈願した。正月には書き初めをしている。師匠は酒好き
めいしゅこ
なのか、謝儀には「銘酒壺」が書かれており、「入学の時お強米を配分」とあり、入学する親が先輩の寺子に赤飯などをふるまった。

石仏村(図5)には、一宮三八市の商人名簿にも登場する木綿問屋の福島屋幸右衛門や岩倉村の商人とともに一宮の木綿買い出しに従事する東左衛門という農民もいた。福島屋堀尾幸右衛門は農業を本業にしつつ木綿問屋も経営しており、貸借金証文の存在から手広く金融業も営んでいたことがわかる¹³⁾。幸右衛門も東左衛門も、石仏村の庄屋を勤めており、村の名望家であった。この村の草分けは服部、宮田、堀尾の3家であり、同村の苗字には3姓が多い。

村のもう1つの寺子屋は、村の唯一の寺稲原寺の道山和尚が開いた寺子屋である。稲原寺は元の名称を稲原庵と称していた曹洞宗の寺で、小折村久昌寺の末寺である。住職道山和尚の寺子屋は、開業・廃業及び寺子数が不明で、読・書・算の3科を教えたとあるのみである。

八剱村の小島喜右衛門経営の寺子屋は読・書・算の3科で、習字・読書の内容は宮田平右衛門経営と同じ、珠算では「八算・見一・相場割・田地割」を教えた。小島の寺子屋も天神祭を行っており、束脩・謝儀は「盆正月に白米2升、時々新物到来物」とあり金納でなく物納であった。「八算」「見一」は算盤による割り算のことで、相場割とは比例計算のことだが、これらは農業にも商業にもこの時期の民衆に必要とされてきた知識であった。

八剱村の村民の職業構成は、嘉永2(1849)年の「人別御改帳」から分かる。人口484人、戸数113戸(内持家101)、職業別で農業96とある。綿作関係4戸は綿稼ぎ商売1・綿賃より渡世1・農業並に綿打渡世1・綿より渡世1である。これにかせ糸関係の奉公並に家内かせ糸商売1・奉公家内かせ糸渡世1・かせ糸商売1や、農業並に大工1・医師1・柄杓商売1他がある。圧倒的に農業渡世が多い中で、農業に従事しつつ綿作やかせ糸の商売に携わるものもおり、村には日用取奉公人もいた¹⁴⁾。石仏村・八剱村には、畑地での綿作栽培を換金作物として商う綿作関係の間屋や綿糸関係に従事する農民がいたのである。

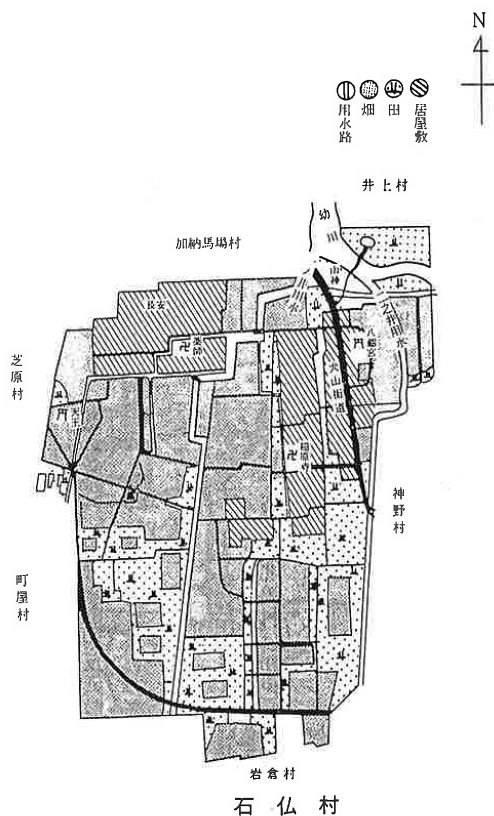


図5 石仏村
(『岩倉市史』上巻 107頁)

(2) 石仏村近隣の千秋村・小折村の寺子屋

石仏村から北の隣接する村に、加納馬場村かのうまんばむらと芝原村しばはらむら（のち千秋村、現一宮市）があり、西に町屋村まちやむら・佐野村さのむら（現一宮市）がある。すぐ近隣の村々の寺子屋の評判が話題になるのは当然であったし、自分の村にいないすぐれた師匠のいる場合や学びたい学科やよりレベルの高い学びを求める場合は近隣の村の寺子屋に通ったことが考えられる。井上村の子どもは、八剣村の寺子屋か北の隣村曾本村や小折村（のち布袋村、現江南市）や、あるいは加納馬場村や芝原村の寺子屋に通ったと推定できる。

ここでは、加納馬場村と芝原村（のち千秋村）と曾本村そもとむらと小折村こおりむら（のち布袋村）の寺子屋を見ていく。この地域の子どもの通う可能性ある寺子屋を1村だけでなく、同じような経済発展のある近隣村落の寺小屋まで広げてみていく必要がある。旧来の研究は、1村の子どもの通う寺子屋を自村のみとみていて、同質地域の学習機会を求める地域民衆の立場から検討してこなかった。しかし、下記にみるように、石仏村と加納馬場村・芝原村との関係はたんなる隣村同士というだけではなかった。

加納馬場村と芝原村の2村は、1889（明治22）年10月1日の町村制施行により、石仏村・神野村・八剣村・井上村の4カ村とともに町村合併で「幼村おきなむら」となった。その後1906（明治39）年5月、4カ村は岩倉町に合併、2カ村は千秋村に合併した。6カ村の幼村の歴史は17年間だったが、この間は「尋常小学加納馬場学校」から「幼尋常小学校」へと同一学区であった時代を共有している。その後、1909（明治42）年に4カ村は「岩倉尋常高等小学校」、1910（明治43）年に2カ村は「千秋尋常高等小学校」に分かれていく¹⁵⁾。

表6 石仏村近隣の村々の寺子屋（加納馬場村・芝原村と曾本村・小折村）

師匠名	身分	位置	開業	廃業	寺子数	学科	備考
〈千秋村（一宮市）〉							
1 佐々宇右衛門	農	加納馬場村	文久期	明治初	男40	読・書	号露水
2 佐々養元	医者	同上	文政期	文久期	男20	読・書	
3 後藤智善	僧	同上	天保末期	明治元	男25	読・書	（法光寺）
4 川口丈四郎	農	同上	文久期	明治4	男20	読・書	
5 後藤平八	農	芝原村	文政初	天保2	男20	読・書	
後藤親兵衛	農	同上	天保2	安政2	男20	書	
後藤恒衛	農	同上	安政2	明治初	男60	読・書	号荒圃
〈小折村（江南市）〉							
1 道明	僧	小折村	天保期		男20女5	書	（松岩寺）
暮石普門	僧	同上	慶応期	明治7	男70	読・書	（同上）
2 生駒円之	僧	同上	明治初		男50	読・書	（般若寺）
村上鉄城	僧	同上	明治初	明治7	男30	読・書	（同上）
3 中山新吾	農	曾本村	明治初	明治7	男30	読・書	

（『千秋村史』1956年、『愛知県寺子屋一覧』1973年、『五明区史』1987年）

『千秋村史』には、芝原村の後藤平八・新兵衛・恒衛の寺子屋には近隣村落から通う寺

子の多かったことを「芝原には弟子の建てた石碑により、後藤新兵衛・後藤平八の寺子屋があったことがはっきりしている。これを建てた弟子達が町屋・天魔・佐野・加納馬場・芝原とあるところからみると、当時の寺子屋は近郷の者が自由に通学したことがわかる」（116頁）と記している。後藤家は代々寺子屋を経営しており、三代目の後藤恒衛については「荒圃後藤翁碑」の石碑が弟子達によって建てられ、千秋村史は「芝原が文教の中心地であった」としている。

芝原村・加納馬場村の西隣の佐野村の水野龍枝の寺子屋は、弟子達に建てられた石碑には「之に刻まれている範囲が天魔・佐野・穂積塚本・勝栗・小淵・八剣・神野・犬山とあるところから想像すると有名な人で相当数の弟子達が通っていた」と述べている。八剣村には2カ所の寺子屋が設立されていたが、近隣他所の名のある寺子屋にも通った子どももいたことがわかる。水野龍枝の寺子屋は、1973年調査には名前だけしか記されていない。

小折村の寺子屋は、1973年調査には4カ所となっているが、松岩寺しょうがんじの住職2人と、般若寺はんんにゃじの住職2人が経営していたのでここでは2カ所とした。1973年調査は小折村5カ所と数えているが、これも記述の誤りである。1872（明治5）年に義校になる時、松岩寺が緝熙学校に、般若寺が啓明学校となり、さらに1878（明治11）年に緝熙学校から布袋野学校ほていの、啓明学校は小折学校に変わっていく¹⁶⁾。

小折村・曾本村からさらに北に向かうと、東大海道村に女師匠が経営する寺子屋があった。尾張北部の旧丹羽郡では女師匠は少なく、尾張部全域でも女性の寺子屋師匠はきわめて珍しい。東大海道村の野々村貞照ののむらていしやうという尼僧が寺子屋の女師匠である。釈迦堂しやくかどうの住職であり、男70人・女20人の寺子を教えた。開業年・廃業年とも不明であるが、1931年調査の沿革記事はとても興味深い。釈迦堂は庵寺で、葉栗郡宮田町大字前飛保の曼陀羅寺まんだらじの末寺であった。「庵ノ住職ナレドモオ気煥発中々ノ女丈夫ナリト末寺住職敏腕ナリシタメ本寺ハ之ヲ嫉ミ事毎ニ圧迫ヲ加ヘ遂ニ住職ヲ放逐庵屋ヲツプス現今何等跡方ナシ」。尼僧貞照の寺子屋は近隣の男女の寺子多数が通っていたが、本山曼陀羅寺が圧力をかけて庵室を破壊して寺子たちの学習機会を奪ってしまったというのである。8歳から13・4歳まで5～7年修業できる寺子屋で、寺子は貞照の書いた手本で「いろは・名頭・名付・村付・商売往来」を学び、読書で「大学・孝経・四書こうきやう ししよ」を学習した¹⁷⁾。

(3) 岩倉村と岩倉南部の村の寺子屋

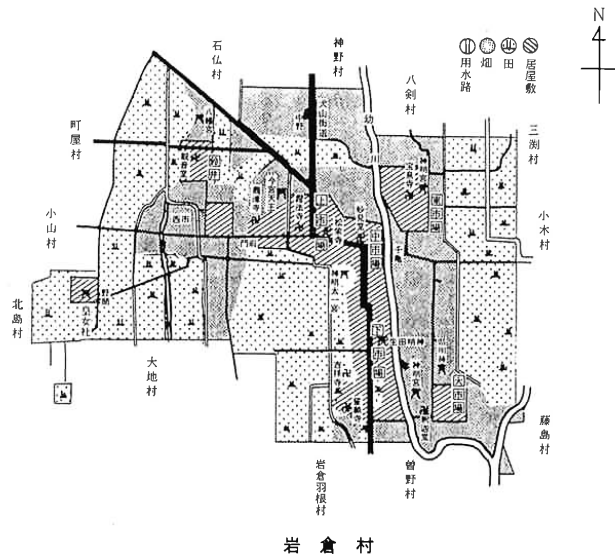
岩倉の北部の村落の石仏村から犬山街道を1キロほど南下すると、岩倉村に達する。街道筋に市場町が北口、上市場、中市場、下市場、大市場、東市場と続く。商業地であり、職人町であっていわゆる町場である。ここはかつて尾張上4郡かみよんぐんを支配した織田伊勢守家おだいせのかみの城下町で栄えたが、織田信安の時に織田信長と浮野合戦で敗北して岩倉城は落城した。近世では尾張藩の小牧陣屋（代官所）の支配下の市場町となっていた。岩倉村から南に向かうと、五条川沿いの北島村、野寄村がある。その南西には、美濃今尾藩領（尾張藩家老竹

越家支配地)の大地村、犬山藩領(同家老成瀬家支配地)の岩倉羽根村(のち稲荷村)、曾野村、大山寺村、川井村が続く。

岩倉村は中心部に神明大一社、新溝神社が鎮座している町で、犬山街道沿いの往還に家々の街並みが続く町である。高度経済成長期ころまでの町の風景は、明治期からほぼ集落の分布状態に変動がなかったと推測される。大正末年生まれの母の在所は北口の畳屋で、近隣付近はさまざまな職人たちの住む家並みがあった。向かいは呉服仕立屋・下駄屋・傘屋、隣は雑貨屋・鶏肉屋が続き、すぐ近くに魚屋、駄菓子屋、八百屋、豆腐屋などの軒並みが続いていた。

岩倉村の人口は『尾張徇行記』(1822年)では、戸数415戸、人口1740人とある。17世紀後半の『寛文村々覚書』の戸数369戸、人口2085人と比べると、19世紀前半の戸数は増加しているものの人口数は減少しているが、近隣の村落から見れば大きな商業地の町場であった(図6)。少し時代が下る1835(天保6)年の「^{かみいちばえいたいちよう}上市場永代帳」から多様な職人や商人の存在していたことがわかる。軒・人・店の区別をしないで「岩倉三町之内商人職人」を見ていくと、商人職人は総数191である。内訳を見ると木綿関係の商人が多く、木綿屋4・木綿小売方3・わたや7・綿問屋1・さし綿4と19軒ある。加えて干鰯屋1・油屋2・質屋7・古手屋(呉服古物)3・米屋9・米まん中6・米屋6・酒屋2・宿屋3・小間物屋2・万屋7・こん屋5・^{あいかぶ}藍株2・よせ屋2、さらに医者3・^{しょうやくや}生薬屋2・売薬調合2・^{かみゆい}髪結6・あんま1・もみ医1など多彩である。寺子屋の^{てならい}手習師3、^{ねぎ}禰宜2・^こ巫女2・寺6・小寺5も書かれている。他には、建築関係の材木屋3・桶屋5・大工5・ひよ方6・^{かわらぶき}瓦葺2、食料品の豆腐屋7・粉屋4・せんべ屋2・米せんべ3・菓子屋2など多彩な職業に従事している在郷町岩倉村の姿が浮かびあがる。

さて、綿作・青物の農業地域を後背地にもった商業地であった岩倉の寺子屋は、幕末にどれぐらいあっただろうか。文部省『日本教育史資料』八(1892年)では10校で、岩倉村と岩倉南部の村では8校しか記載されていない。1931年調査では11校で同じく9校にとどまっている。だが、1973年調査になると岩倉全体で27校、石仏村と八剣村を除くと23校を数え、次の表7のようであった。なお



岩倉村
図6 岩倉村
(『岩倉市史』上巻 96頁)

寺子数に関しては、1931年と1973年の両調査で記入され、異なる場合1931年調査の数を示した。女師匠は岩倉羽根村の梅芳尼1人であった。1973年調査は浄正寺を岩倉村と誤記載しているため岩倉羽根村と訂正した。

表7 岩倉村・岩倉南部の村の寺子屋 □は1973年調査のみ ○1931年調査

師匠名	身分	位置	開業	廃業	寺子数	学科	備考
〈岩倉村〉							
1 吉田資信	神官	中市場		明治6	男40*	読・書・算	○
2 安藤良逸	医者	上市場		明治6	男40*	読・書	○
3 柴田尊磨	平民	下市場		明治6	男40*	読・書	父長久も師匠○
4 松栄寺	僧	上郷					□1973年調査
5 誓願寺	僧	下寺廻					□1973年調査
6 吉祥寺	僧	下市場					□1973年調査
〈岩倉南部の村々〉							
1 梅芳尼(観音堂)	尼僧	岩倉羽根村		明治初		読・書	□1973年調査
2 柴田忠右衛門	平民	同上	明治2	明治7	男30	書	□1973年調査
3 浄正寺	僧	同上	明治初				□1973年調査
4 河村猪右衛門	平民	曾野村		明治5・6	男40	読・書	○
5 恭堂(神清院)	僧	同上	万延元	明治初	男20	読・書	□1973年調査
6 森山直右衛門	平民	大山寺村	明治初	明治5	男10	読・書	○
7 原 大禅	僧	北島村	明治初	明治10	男50女5	読・書・算	○
8 桜井糸三郎	平民・商	同上	安政期	明治初	男56	書(龍屋)	□1973年調査
9 下間(織田)黙章	僧	大地村	文政10	明治6	男15女10	読・書	子巖融も師匠○
10 水越理三郎	平民・農	同上		明治初		書	□1973年調査
11 小池利兵衛	平民・農	同上				算	□1973年調査
12 三輪周右衛門	平民・農	野寄村	明治初	明治6		読・書・算	□1973年調査
13 船橋誠諦 (良念寺)	僧	同上	幕末期	明治初		書	□1973年調査
14 後藤糸八	平民・農	川井村	天保5	文久3	男40	読・書	□1973年調査
15 森 泰助	医者	同上	天保10	文久3	男15	書	□1973年調査
16 藤川礪拙 (大聖寺)	僧	同上	文久2	明治5	男20	読・書	□1973年調査
17 古田梵仙 (光禅寺)	僧	同上	幕末期	明治初		読・書・算	□1973年調査

(『愛知県寺子屋一覧』1973年を修正して作成)

岩倉村と南部の村の特色ある寺子屋を見ていく。町場の岩倉村の吉田資信経営の寺子屋は、読・書・算の3科を教えたが、習字では「いろは・片仮名・名頭・村名・郡名・国名・商売往来」をあげており、読書では実語教・童子教・三字経・孝経・四書・五經の伝統的な儒学の入門の古典を教え、珠算では八算・見一・相場割の商業活動に最低必要な知識を教授している。習字の流派は御家流と大橋流の2つとしており、江戸時代の大半の寺子屋で学ぶ流派の御家流だけでなく、大橋流も吉田の寺子屋で学ばれたようである。

2月25日の天神祭は「天神宮例祭神饌ニ酒菓子ヲ供シ参拜 子供ニ菓子ヲ分配スルコトアリ」「師匠ノ家ニ巻物ヲ掛ケ参拜セリ」とある。寺子屋の賞罰に関して、賞はとくになく、罰は「不行状又ハ乱暴ナル生徒ハ（今の）1時間位ノ直立或ハ教場ノ掃除ヲナサシムルコトアリ」。他の寺子屋でよくある「食止め」はなかったようだ。吉田の寺子屋の東脩では「古来各生徒へ披露ノ為身分相応ニ駄菓子ヲ分配シ師へ赤飯一重持参 年末ト中元ニ身分相応ナル謝儀ヲナス」という状態であった。とくに東脩・謝儀で金銭に関わる記述はない¹⁹⁾。

北島村の原大善や野寄村の三輪周右衛門の寺子屋では、謝儀に関していずれも「五節句に百文ないし三百文の謝儀」として、大山寺村の森山直右衛門、川井村の藤原礪拙の寺子屋では「五節句・盆正月百文の謝礼をなす」「五節句に銭百文を持っていく」とあり、また曾野村河村猪右衛門のところでは「正月とお盆に物品或いはお金を持っていく」と書いている。このように岩倉南部地域の村の寺子屋の方が謝儀の金銭記述が明確である。師匠の家で寺子たちが「七夕の時うどんを御馳走になり」交遊を深め合うとの記述もあり、子ども同士ののびやかな交流が師匠の家で行われていたようすがわかる²⁰⁾。

吉田資信の自宅で開いた寺子屋は、明治5年に義校となり、6年に小学校の教場になっていく。吉田は愛知県からの辞令が下されて、「第三中学区第35番小学校 岩倉村 吉田資信宅 右決定候事 明治六年九月 愛知県」の書面を受け取っている。

(4) 明治初期の岩倉の小学校設立

『文部省年報』第2年報（明治7年）の「愛知県小学校表」では、岩倉市域の小学校は3校が設立・開校していた。先進学校（石仏村）、岩倉学校（岩倉村）、憲道学校（大地村）でいずれも1872（明治5）年に義校で出発するが、1873（明治6）年になり「学制」下の小学校として創立された。1879（明治9）年になり川井村に大野川学校が創立されて4校となる。先進学校は幼川学校に、憲道学校は大地学校へと校名を変更した。以下に明治7年から明治10年までの岩倉市域の各校の教員数、生徒数の変遷を表8にまとめておく²¹⁾。

表8 明治7～10（1874～77）年の岩倉市域の小学校

	明治7年		明治8年		明治9年		明治10年	
	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数
先進学校 （石仏村）	男2	男85女35	男2	男78女15	男2	男73女21	男1	男30女3
岩倉学校 （岩倉村）	男4	男205女30	男2	男90女30	男3	男97女45	男3	男101女30
憲道学校 （大地村）	男3	男71女21	男2	男104女18	男1	男49女10	男1	男37女7
大野川学校 （川井村）					男2	男57女11	男2	男59女2
					校名幼川学校に変更			
					校名大地学校に変更			
					明9に憲道より分離			

（『文部省年報』第2年報～第5年報 1874～77年）

岩倉北部地域の先進学校は、1873（明治6）年9月25日に石仏村49番地の^{とうげんじ}稲原寺を借用して開校した。石仏村・神野村・八剱村・井上村の4カ村による設立であった。1876（明治9）年6月18日に石仏村・神野村・八剱村の3カ村で維持・管理する学校として幼川学校と校名を改称した。井上村は、1877（明治10）年に隣村の加納馬場村・芝原村と亀石学校（位置加納馬場村）を設立した。1883（明治16）年になると、井上村は小折村・曾本村とともに設立した尋常小学小折学校（位置小折村）に通わせていく。1886（明治19）年に八剱村は、岩倉村と連合していく²²）。1887（明治20）年4月に学区数が減少して学校統廃合が行われていき、石仏村・神野村の2カ村は加納馬場村・芝原村・佐野村と連合して、第18学区尋常科加納馬場小学校（位置加納馬場村）を設立していく。その後、町村制施行により石仏村・神野村・八剱村・井上村・芝原村・加納馬場村野6カ村は合併して幼村となり、幼村は幼尋常小学校を設立した。

幼尋常小学校（位置幼村）〈石仏・神野・八剱・井上・芝原・加納馬場〉

岩倉学校は、1873（明治6）年9月30日に岩倉村神明社神官の吉田資信宅を借用して第3中学区第35番小学校を設立した。1874（明治7）年4月24日岩倉村162番地神明社境内に移転して岩倉村全域を通学範囲とした。新築校舎は、神明大一社拝殿の南西で東西五間、南北一〇間、五〇坪の校舎であった。1874（明治7）年5月2日付「学校新築場所之義願書」（岩倉村より愛知県令鷲尾隆聚宛）には、「岩倉学校之義ハ吉田資信宅に於て開業罷在候^{まかりありそうろうところ} 処^{ただいまに} 生徒只今ニ而ハ^{ては} 貳百名余有之其の上日増に進ミ候者有之 右資信宅ニ而ハ^{てせま} 手狭ニ御座候付当節既ニ^{ごそうろう} 造営ニ^{ぞうえい} 取掛^{とりかかりそうろう} 候」との理由が書かれている。1876（明治9）年には、第77、78、79番岩倉学校と改称し、1879（明治12）年には公立岩倉学校と再改称した。1886（明治19）年には尋常小学岩倉学校と改称して岩倉村と八剱村と連合している。その後八剱村は幼村に編入、再び岩倉村単独で岩倉学校を維持していく。

岩倉尋常小学校（位置岩倉村）〈岩倉〉

岩倉南部地域の学校は、次のように変遷していく。1873（明治6）年に大地村^{しやうきじ}正起寺境内に、大地村・野寄村・川井村・大山寺村・曾野村・岩倉羽根村の6カ村で憲道学校を設立した。教場は川井村の^{だいせいじ}大聖寺、野寄村の^{りやうねんじ}良念寺にもあったといわれる。いずれも元寺子屋であった。1875（明治8）年大地村坂折神社東隣に新築して大地学校を開校した。同年に、大地村から曾野村・岩倉羽根村が分離独立して2カ村で、^{ぐんなん}郡南学校を設立した。1876（明治9）年に川井村・野寄村・大山寺村の3カ村は、大野川学校を川井村大聖寺境内に設立した。

北島村は、1873（明治6）年には三ツ井村（丹陽村・現一宮市）の^{はくぶん}博文学校に通学していた。ついで1875（明治8）年に伝法寺村（丹陽村）にできた^{でんぼうじ}伝法寺学校に通った。1878（明治11）年になり北島村単独で北島学校を設立した。その後、1884（明治17）年には野寄村が北島学校に通うようになる²³）。

岩倉の南部地域の学校は、北島村・野寄村の2カ村は伝法寺村・九日市場村・五日市場

村と連合して、尋常科伝法寺学校を設立する。他の5カ村（曾野・大山寺・岩倉羽根・大地・川井）は尋常科岩倉羽根^{いわくらほね}学校を創設した。1889（明治22）年の町村制後には、岩倉の南部地域では、豊秋村と島野村の2カ村が誕生した。

豊秋尋常小学校（位置豊秋村）〈大地・川井・大山寺・曾野・岩倉羽根〉

島野尋常小学校（位置島野村）〈北島・野寄〉

明治末期となり、日露戦争直後の1906（明治39）年に岩倉村・幼村・豊秋村・島野村は合併して岩倉町となる。翌年1907（明治40）年1月に岩倉第一尋常小学校（石仏・神野・八剣・井上）、岩倉第二尋常小学校（岩倉）、岩倉第三尋常小学校（北島・野寄・川井・大山寺・曾野・稲荷・大地）が設立された。高等科は、5年前の1902（明治35）年に岩倉高等小学校が設立されていたが、1909（明治42）年に尋常科・高等科併設の岩倉尋常高等小学校が岩倉で開校した。同時に南部地域の村々は岩倉第二尋常小学校を開校させていった²⁴⁾。

注

- 1) 木全清博『滋賀の学校史』（文理閣 2004年）巻頭。方言についての出典は『全国方言辞典』（1971年43版 1951年初版）である。
- 2) 『維新前寺子屋、手習師匠、郷学校、私学校の調査』（1931年）。愛知県教育会の教育史編纂責任者伊奈森太郎蔵印本が、愛知県図書館で閲覧・複写できる。
- 3) 『愛知県教育史（古代・中世・近世編）別冊 愛知県寺子屋一覧』（1973年）。愛知県教育委員会編纂本だが、出典や原資料の所在を明記していない。
- 4) 注3)本は、愛知の寺子屋研究にも影響を及ぼした。野村知男の一連の愛知県寺子屋研究は、文部省『日本教育史資料』八と『愛知県寺子屋一覧』の統計的な比較考察を中心に行っているが、原典資料や典拠への問題点を考慮せずに進めている。野村知男「愛知県寺子屋教育地図」(1)(2)『近畿大学教養部研究紀要』第14巻第1～2号 1982年、同「愛知県下の寺子屋教育の展開」(1)～(4)『近畿大学教養部研究紀要』第16巻第1～3号・第17巻第1号 1984～85年。野村は、愛知県教育会の1931年調査(注2)文献)を全く取りあげていない。

原典資料や資料所在地の明記の重要性に関して、吉永昭の鋭い指摘がある。吉永昭『愛知県の教育史』（思文閣出版 1983年）。第4章第1節寺子屋の普及及び付録の私塾寺子屋一覧は、先行研究中の必読文献であり、同書の詳細な参考文献は有用である。

- 5) 丹羽健夫『愛知の寺子屋』（風媒社 2012年）。1931年調査用紙を徹底的に読み切り、鮮やかに愛知の寺子屋をえがいている。寺子屋案内書としては、江戸教育事情研究会『寺子屋のなるほど!!』（YAMAHA 2004年）がある。
- 6) 濃尾平野の叙述は、森原章・吉永昭監修『愛知史蹟郷土史』（1982年）所収の太田正広「犬山市の歴史」、岸雅裕「岩倉市・江南市・丹羽郡の歴史」、岩野見司・小野田雅一「一宮市・葉栗郡の歴史」を参照した。図1濃尾平野地形図は、長谷川輝『町屋 村物語』1985年口絵を引用した。
- 7) 丹羽郡役所『丹羽郡制史』（1924年）、丹羽郡教育会『愛知県丹羽郡誌』（1917年）
- 8) 『前掲書』注5) 54頁
- 9) 『五明区史』（江南市布袋町五明区 1987年）、7校の寺子屋に重複が2校ある。

- 10) 塚本学・新井喜久夫『愛知県の歴史』（山川出版社 1970年）
- 11) 『前掲書』注6) 岸雅裕「岩倉市・江南市・丹羽郡の歴史」217頁
- 12) 『岩倉市史』上巻（1985年）680頁、『岩倉町史』（1960年）
- 13) 『同上書』776～800頁
- 14) 『同上書』661頁
- 15) 『千秋村史』（1956年）115～120頁、『前掲書』注2) No.124～131 千秋尋常高等小学校・千秋第一尋常小学校・千秋第二尋常小学校の調査
- 16) 『前掲書』注9) 239～252頁
- 17) 『前掲書』注2) No.65 布袋尋常小学校調査
- 18) 『前掲書』注12) 773頁
- 19) 『前掲書』注2) No.155 岩倉尋常高等小学校調査
- 20) 『同上書』No.154、159 岩倉尋常小学校調査
- 21) 『文部省年報』第2年報～第5年報（明治7～10〈1874～77〉年）
- 22) 『岩倉市史』中巻（1985年）567～588頁
- 23) 『同上書』579～580頁
- 24) 『前掲書』注7) 『丹羽郡制史』305～306頁「丹羽郡小学校沿革一覽表」